

# 2016年度 国内研修 報告書

研修地:北海道檜山郡厚沢部町  
研修期間:1/31～2/5

## 1. 研修の目的

この研修の目的は、現代福祉学部での学習を踏まえて学外での活動を視察・経験し、考察するとともに、今後の3領域の学習計画に活かすことである。

入学して約10ヶ月が過ぎ、私は福祉・地域・心理の3領域の入口を学んだが、それは机上での学習に過ぎない。現代福祉学部の先生方は皆、現場に出て学ぶことがとても大きな経験になると仰っていた。そこで2年生になる前にどこか地域や福祉の現場に飛び込み、生の空気や情報に触れようと思った。

## 2. 研修内容

1月31日 移動

2月1日 移動、地域協力隊の方にご挨拶

2月2日 役場訪問、町内案内、町長さんとお話

2月3日 道の駅(観光協会)訪問、館小学校 放課後フリースクール参加、地域協力隊の方々との宴会  
2月4日 音楽療法見学、元気はつらつ体操(運動療法)体験、町内施設見学(保健福祉センター等)、ゆいま〜る訪問  
2月5日 ちょっと暮らし住宅見学、移動

### 3. 厚沢部の基本情報

人口：4184人

高齢化率：37.8%

面積：460k m<sup>2</sup>

農家件数：300戸

学校：小学校4校、中学校3校

特産品：メイクイン(じゃがいも)、サツマイモ、蝦夷舞茸、切り干し大根等

### 4. 研修で学んだこと

研修の中でも、特に福祉・地域分野において印象深かった3つの施設について挙げる。

#### ①道の駅(厚沢部町観光協会)

厚沢部町観光協会は1979年に地域産業の担い手として誕生し、当時から道の駅あっさぶや町祭事事務局を運営してきた。建物内は販売スペースとカフェスペースに分かれており、カフェではソフトクリームや厚沢部名物のメイクインコロッケを販売している(冬は休業)。建物の壁や天井には道南の木材が使用されている他、道南の木材の余りを買って薪ストーブへの再利用も行っている。お手洗いには日本語・英語・中国語の3か国語が使われており、海外利用者への配慮もされている。

販売商品としては厚沢部及び周辺の地域で生産された加工食品や菓子類が一番種類が豊富で、次に食品以外でのお土産品、野菜と続く。売り上げ品の比率でも加工食品や菓子類が最も多く、次に野菜、酒類、食品以外のお土産品と続く。これらの商品以外にも、豆・米類、工芸品、地元の方々がつくった手芸作品等も販売されている。2012年度から毎年1,000万円程度売り上げを伸ばしており、2015年度は8千8百万円の売り上げが見込まれている。顧客数も毎年一万人程度増えており、2015年度は7万4千人の顧客数が見込まれている。

課題として冬場は雪が多く降るため、来客数が激減する点が挙げられる。また、観光客向けの商品が中心のため、地元の方々からの売り上げは見込みにくい。地元の方々もターゲットにするならば、日常生活用品も揃えるべきであるが、道の駅は行政と民間の間の立ち位置にある店であり、日常生活用品を販売すると民業圧迫になってしまう。

冬場の来客数減少に対しては、観光協会が準備を進めている。道の駅あっさぶでは法人格をもたない任意団体だったが、現在法人格取得のための調整をしている。法人格を取得すればカード決済を利用することができるようになるため、通信販売による売り上げの拡張が可能となる。道の駅あっさぶの商品展開、売り上げ品比率はともに加工食品や菓子類のため、保存期間が長いものも多く、通信販売にも向いている。

他に改善できる点として冬場のカフェスペースの使用方法がある。来客数減少に伴い、冬場のカフェスペースは休業し、椅子と机だけの休憩スペースとなっている。そこで広めの面積を活かし、イベントを行ったり、集会場として地元の方々に貸し出しをすることが可能であると考えられる。そうすることで、道の駅あっさぶと観光客だけでなく地元方々との交流も生まれるのではないだろうか。

#### ②ゆいま〜る厚沢部

介護付き有料老人ホーム。利用者にはそれぞれ個室が用意されており、部屋や扉の装飾も自由に行うことができる。個室を出ると共用のリビング・ダイニングスペースとなっており、利用者は好きなほうで時間を過ごすことができる。敷地面積は約2万8千平方メートルである。バリアフリーが徹底されており、廊下は車イスが2台通ることのできる幅の広さを持つ。また階段を使わな

くてもよいように、ほぼ1階建てのみの施設になっている。また、洗濯は利用者が自分ですることになっており、1人では洗濯が困難な利用者には補助者がつく。これは利用者の自分の衣類を他人に触れられたくないという気持ちへの配慮であり、補助者がつく場合も、利用者の洗濯物には一切振れない決まりになっている。このように、ゆいま〜るではスタッフが利用者をお世話するのではなく、利用者の気持ちを尊重した、生活のお手伝いをするのが目的となっている。

庭やプールが併設されており、すぐ側には学校もあるため、施設の外にも楽しみを見いだすことができる。

### ③ちょっと暮らし住宅見学

「ちょっと暮らし住宅」とは素敵な過疎づくり株式会社が行っている事業の1つである。外部から厚沢部への移住促進が目的である。利用者は一定期間住宅を借り、実際にそこで暮らすことで、厚沢部の自然や住民、町内制度等について知ることができる。近隣に農家を営む家が多い住宅では、地元の方々との宴会が開かれることもある。滞在期間は1週間からで、住宅は4種類から選ぶことができる。この住宅にはバリアフリー、近代的等それぞれコンセプトがあり、幅広い層の受け入を可能にしている。利用者やリピーターの数は多く、季節によっては定員以上の応募がある。しかし、未だにこの事業の利用者が移住するにまで至った例はない。課題として、費用が決して安いわけではないことが挙げられる。現在最も利用しているのは財産と時間に余裕のある高齢者であり、住宅の種類の豊富さが最大限に活かしていない。また、移住を決めたとしても、借りていた住宅にそのまま住めるわけではない。そのため住む物件がすぐには見つからないことや、ちょっと暮らし住宅のような広くて工夫の施された住宅は厚沢部町では手に入りやすく、実際に移住することになると、住宅の規模の違いに戸惑う可能性があることも問題である。

私は厚沢部町がこれらの課題を解決するためには、今のような広さや快適さを重視した住宅ではなく、例えば古民家等、町に多く実在している規模の住宅をなるべく低価格で貸し出しできるように体制を整えるべきだと考える。住宅の規模を町のものと同程度に抑えることで、利用者はちょっと暮らしをした後、実際に移住した際の生活イメージをつかみやすくなる。また、古民家を再利用することができれば、住宅へかかる費用が少なくなり、学生や若者、家族連れ等、高齢者ほどには財産に余裕のない利用者が増えると考えられる。さらに、不動産会社と提携し、利用者がすぐに移住できる選択肢としての物件をいくつか用意しておけば、従来よりも移住がしやすくなるのではないだろうか。

## 5. 感想

厚沢部町の町づくりのコンセプトは「素敵な過疎の町づくり」である。無理に人を移動させようとするのではなく、過疎を受け入れながらも土地の魅力を磨き、外部から移住してもらう、という考えである。

現場に出ることで、話を聞くだけでは分からなかった地域の現状や魅力を知ることができた。福祉と地域の関連性が極めて高いということも改めて実感した。この研修で得た地域・福祉への考え方を2年次での学習に活かせるようにしたい。